

グルック (ワーグナー編) 歌劇〈オーリードのイフィジェニー〉序曲

クリストフ・ヴィリバルト・グルック (1714~87) は、オペラのドラマ性を高めた18世紀における改革者として知られている。ウィーンで成功を収めた後、パリでの成功を目論み、ウィーン時代の声楽の弟子でフランス皇太子妃となっていたマリー・アントワネットの助力を得て、1773年に転居。半年間の徹底したリハーサルの後、満を持して発表した最初のオペラが〈オーリードのイフィジェニー〉であった。

ギリシャの大將アガメムノンは、出帆のため娘イフィジェニーを生贄に捧げると女神に約束する。事情を知ったイフィジェニーは愕然とするが、父の愛を信じ自らの命を差し出す決意を固める。これに心を動かされた女神は、イフィジェニーを救い出帆の風を吹かせる、というのがおおよそのあらすじである。

19世紀半ばにはワーグナーが自らスコアに手を入れたドイツ語版を作成し、それまで忘れられていたこの作品は、ドイツ各地で演奏されるようになる。この時ワーグナーは、イフィジェニーが祭司としてトーリードに赴くよう結末を書き換えたので、グルックの別のオペラ〈トーリードのイフィジェニー〉は本作の後日譚となった。父アガメムノンを殺したその妻クリュテムネストラに復讐するエレクトラの話もまた、本作の後日譚と言えるだろう。〈エレクトラ〉(R. シュトラウス) は来年2月にヴァイグレと読響が取り上げるが、今回の選曲はその伏線でもある。

序曲は荘厳な開始に導かれ、勇壮なテーマがユニゾンで力強く歌われる。様々な感情を一つの流れに組み込んでいく手さばきに、グルックの天性が表れている。ワーグナーは18世紀の軽快なオーケストレーションを、重厚なロマン派のそれに書き換え、さらに序曲を独立した楽曲としても演奏できるように、冒頭部のテーマを用いたコーダを加えている。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1772年／初演：1774年4月19日、パリ(原作)、1847年、ドレスデン(ワーグナー編曲版)／演奏時間：約10分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット3、ホルン4、トランペット3、ティンパニ、弦五部

フランツ・シュミット 歌劇〈ノートル・ダム〉から間奏曲と謝肉祭の音楽

ヴィクトル・ユゴーの小説を原作としたフランツ・シュミット (1874~1939) のオペラ〈ノートル・ダム〉は、1904年から06年にかけて作曲された。文芸創作にも造詣が深かった化学者レオポルト・ヴィルクとシュミットの協業による台本は、ロマの娘エスメラルダを中心とする悲劇へと原作を組み直している。交響曲第1番によってベートーヴェン賞を得た新進作曲家、またウィーン宮廷歌劇場の名チェリストでもあったシュミットの野心作にもかかわらず、時の音楽監督のマーラーは取り上げなかった(若いシュミットはマーラーとの確執にかなり疲弊したようだ)。

着手から10年後(1914年4月)の初演は成功し、現在でもドイツ語圏を中心に時折上演されるが、エスメラルダのライトモチーフ(特定の人物や想念を表す動機)として用いられた、“間奏曲”のエキゾティシズムに彩られた情熱的な旋律こそ、現在もシュミットの名前を最も知らしめているものだろう。ヨハン・シュトラウスの〈ジプシー男爵〉以降、ロマを題材としたオペラはウィーンでは好んで取り上げられたが、ハンガリー系の母のもと現在のブラチスラヴァに生まれたシュミットにとって、それは親しみの湧く音調でもあったろう。

オペラのもとになったのは〈管弦楽伴奏によるピアノのための幻想曲〉(消失)という作品で、実は“間奏曲と謝肉祭の音楽”はこれをもとに作曲され、オペラ着手前の1903年12月6日に初演された。曲は大きく三つの部分から成る。弦のトレモロ、ファンファーレの後の4分の2拍子の足早な音楽は、オペラでは第1幕第2場で謝肉祭の喧騒が戻ってくる箇所に転用された。続くゆったりとした中間部は、第1幕第2場から第3場にかけての場面転換に流れる間奏曲となった。その後、音楽はテンポを早め4分の3拍子となり、謝肉祭の喧騒が再び現れる。これはオペラの幕が開いた後、祝祭に胸を高鳴らせる群衆を描いた音楽である。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1904~06年(歌劇)／初演：1903年12月6日、ウィーン(間奏曲と謝肉祭の音楽)、1914年4月1日、ウィーン(歌劇)／演奏時間：約15分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器(シンバル、銅鑼)、ハーブ2、弦五部

フランツ・シュミット
交響曲 第4番 八長調

フランツ・シュミット (1874~1939) は現在のブラチスラヴァ (スロバキア) にあたるプレスブルクに生まれた。家族と共にウィーンに移住してからはウィーン楽友協会音楽院 (現・ウィーン国立音楽大学) で作曲をロベルト・フックスに、チェロをフェルディナント・ヘルメスベルガーに学んでいる。ウィーン宮廷歌劇場でチェロを演奏する一方、母校でも教鞭を執り (最終的に学長になった)、指揮者、ピアニスト、オルガニストとしても活躍した。作曲家としては4曲の交響曲の他に、オペラ〈ノートルダム〉、オラトリオ〈七つの封印の書〉などがある。

ウィーンの歌劇場のチェリストだった時期は、マーラーの音楽監督期とも重なっており、またウィーンで活躍した同年生まれの作曲家にはシェーンベルクがいるが、彼らよりもよりダイレクトに伝統に関わり、その延長上で創作したシュミットは、生前はアカデミズムの代表格として、この二人よりもはるかに尊敬されていた。ウィーン・フィルの団長だったオットー・シュトラッサーは「…ちょうど私の若い時代に年輩の同僚たちが音楽理論の教授であったブルックナーのことを畏敬の念をもって話したように、私の同年輩の多くの同僚たちがフランツ・シュミットの弟子であり、熱烈な信奉者であった」(芹澤ユリア訳)と回想している。しかし戦後になると、新ウィーン楽派やマーラーの再評価と反比例するように、シュミットの作品は忘れられていった。ナチに迎合したと見られた点も忌避感情を高めたと思われる。

私生活も必ずしも幸せとは言えなかったようだ。最初の妻は1919年に精神病院に入院し、出てくることはなかった。また、その妻との間にもうけた一人娘エンマは1932年、出産の際に命を落としている。

交響曲第4番はこの娘へのレクイエムとして、同年から翌年にかけて作曲され、34年にウィーンで初演された。全体は大きく四つの部分に分かれており、それぞれは交響曲の定型 (アレグロ楽章・緩徐楽章・スケルツォ・フィナーレ) を踏襲しているものの全てが切れ目なく演奏され、重苦しい気分とその苦しきから解放されるかのような夢幻的な境地が交互に出現する意識の連続体を生み出している。冒頭に現れるテーマを全体にちりばめ統一感を出すほか、第4部を第1部の再現のように扱うことによって、単に四つの楽章を連結しただけではない形式の強化を

図っている。こうした点にシュミットの、単純な保守とは言いきれない大胆さ・新機軸がうかがえる。

アレグロ・モルト・モデラート (第1部) は長大なトランペット・ソロで始まる。彼方から響いてくるような不安定で落ち着かない旋律は、全曲をまとめる主題としても機能している。ティンパニが重々しいリズムを刻む中、弦がこの主題を引き継いで拡大していくと、ハーブの分散和音を伴う新しい主題が登場、聴き手を幻想へと誘っていく。鬱屈と夢幻という両極端の気分を往還しつつ、音楽は大きな波動を描いてクライマックスへと高まり、エネルギーを放出して静まっていく中から独奏チェロが姿を現して、アダージョ (第2部) へと移行する。独奏チェロが絶えず上向への意思を示す清涼な旋律を奏でると、やがて軍楽隊風のリズムが聞こえてきて、荘重な葬送行進曲が始まる。悲哀の高まりの後、再び独奏チェロに導かれ清廉な旋律が回帰する。モルト・ヴィヴァーチェ (第3部) は8分の6拍子のスケルツォ風の動きの上で、第1部で示された二つの主題がこだましあう。テンポ・プリモ・ウン・ポコ・ソステヌート (第4部) では冒頭の禍々しい主題をまずホルンが提示、第1部の素材を次々に再現していく。やがて現実の重荷をほどかれ天界へと導かれるように、音楽は徐々に解放感を帯びていき、トランペット・ソロが「人がその予兆の元に生まれ、生きた後、あの世へと引き継いでいく最後の音楽」(シュミット) を奏で、安らかに終わりを告げる。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1932~33年/初演：1934年1月10日、ウィーン/演奏時間：約45分
楽器編成/フルート2 (ピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、エスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、銅鑼)、ハーブ2、弦五部